

2. 研究の詳細

プロジェクト名	ヴィンチェンツォ・ベッリーニの声楽作品に関する演奏法と解釈の研究		
プロジェクト期間	平成 28 年度		
申請代表者 (所属講座等)	橋本 エリ子 (音楽教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	
<p>1. 研究の目的</p> <p>わが国の音楽教育において、声楽の勉強を始めようとする学生が最初に学ぶ教材として、「イタリア古典歌曲集」がある。この歌曲集は、17 世紀から 18 世紀のイタリアのオペラやカンタータのアリアから選曲されたもので、イタリアの音楽学者パリゾッティ(Alessandro Parizotti:1853-1913)の編曲により、リコルディ社から 1914 年に出版され『Arie Antiche Italiane』(古典アリア集 全 3 巻)に準じた選曲と編纂がなされている。</p> <p>しかし、今日的な観点からみると、ロマン主義音楽の演奏様式の影響を示す様々な演奏記号が付けられ、出典や原作に忠実でない等、かなり多くの問題点があり、パリゾッティ版の「イタリア古典アリア集」が今日の声楽教育には必ずしも理想的とは言えない。</p> <p>そこで、ロマン主義の作曲家の中で、最もベル・カント唱法を実現させた作曲家にベッリーニ(Vincenzo Bellini:1801-1835)がおり、特に「ベッリーニ歌曲集」は、これから声楽の勉強を始めようとする学生が、ベル・カント唱法(声の技術及び表現法、様式感の感得)を学ぶために最適な教材であるが、残念なことにベッリーニの声楽作品に関する研究は、現在の日本においては進んでおらず、参考となる文献が存在していない。</p> <p>従って、海外の研究資料の書籍及びベッリーニの書簡集、また現存する自筆譜を詳細に分析し、書簡や証言から得た資料を手掛かりにベッリーニの全貌を綿密に解明し、適切にベル・カント唱法を学ぶことができるように、ベッリーニの声楽作品に関する演奏法と解釈の研究を行った。</p> <p>2. 研究の内容と方法</p> <p>本研究においては、特に下記の 7 項目について、詳細に研究を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) ロマン主義の時代の歴史的背景と音楽習慣について。 (2) ベッリーニの生涯と人物像について。 (3) ベッリーニの声楽作品表の作成。 (4) 芸術歌唱の為の発声法「ベル・カント唱法」に関して。 (5) ベル・カント・オペラ作品の台本作家フェリーチェ・ロマーニ(Felice Romani:1788-1865)との関係。 (彼のオペラ台本の全 10 作中 7 作がイタリア最高峰の作家ロマーニの台本によっている) (6) ベッリーニの歌曲作品と詩の韻律に関して。 特に、ベッリーニの歌曲作品の中でも歌われる機会の多い作品である「3つのアリエッタ」(Tre Ariette)(1.Il fervido desiderio. 2.Dolente immagine di Fille mia. 3.Vaga luna che inargenti)と「6つのアリエッタ」(Sei Ariette)(1.Malinconia, ninfa gentile. 2.Vanne, o rosa fortunate. 3.Bella Nice che d'amore. 4.Almen se non poss'io. 5.Per pietà, bell'idol mio. 6.Ma rendi pur contento)に焦点を絞って、それぞれの作品の韻律法と音楽的特性を分析した。 (7) 自筆譜の分析による、ベッリーニの作品と演奏法の解釈について。 <p>3. 平成 28 年度実施による研究成果</p> <p>ヴィンチェンツォ・ベッリーニの生涯と彼の性格や人物像を詳細に研究し、また韻律法と音楽的特性を詳細に分析した結果、ベッリーニが詩をどのように解釈し、作品を生み出すきっかけになったのかを解明することができた。つまり、イタリア・ロマン主義の作曲家の中で、最もベル・カント唱法を実現させた作曲家であるヴィンチェンツォ・ベッリーニ(Vincenzo Bellini:1801-1835)の声楽作品を分析することで、音楽教育の中でのベル・カント唱法を指導することの意義を深く理解でき、よりわかりやすくイタリア歌曲を指導する方法が分かった。</p>			

具体的には、第一に、ベッリーニの生涯を下記の通り 5 期に分類して、声楽作品の生まれた背景を辿りながら、詳細に分析を行った。

第 1 期 (幼少期) : 1801 年~18 年 (0 歳~17 歳) (生まれ故郷であるカタニーニでの幼少期時代)

- ・幼児期はすでに宗教的な詩に魅了され、多数の宗教曲を作曲した。

第 2 期 (学生期) : 1818 年~23 年 (18 歳~22 歳) (ナポリ王立音楽院時代の学生時代)

- ・成績優秀であり、この時期に、メゾ・ソプラノの為のアリア「私のフィッリデの悲しい姿」(Dolente imagine di Fille mia)が作曲され(1821 年 : 20 歳)、1824 年に出版される。

第 3 期 (青年期) : 1824 年~26 年 (23 歳~25 歳)

- ・年次試験で優秀な成績を収め、第 1 助教の地位に昇進する。
- ・歌劇《アデルソンとサルヴィーニ》(Adelson e Salvini)を作曲し(1824 年 : 23 歳)、母校の音楽院劇場で上演され、大成功を収める。
- ・第 2 作目の歌劇《ビアンカとフェルナンド》(Bianca e Fernando)を作曲し(1825 年 : 24 歳)、この成功により、スカラ座より作曲の依頼を受ける。

第 4 期 (円熟期) : 1827 年~32 年 (26 歳~31 歳)

- ・ロマーニ(Felice Romani)の台本による歌劇《海賊》(I Pirata)を作曲する(1827 年 : 26 歳)。
- ・ロマーニ(Felice Romani)の台本による《異国の女》(La Straniera)を作曲(1828 年 : 27 歳)
- ・歌曲「6 つの歌曲集」(Sei Ariette)が作曲され(1828~29 年 : 27 歳~28 歳)、リコルディ社より出版される。
- ・ロマーニ(Felice Romani)の台本による歌劇《カプレーティ家とモンテッキ家》(I Capuleti e I Montecchi)を作曲し(1830 年 : 29 歳)、大成功を収める。
- ・ロマーニ(Felice Romani)の台本による歌劇《夢遊病の女》(La Sonnambula)を作曲する(1830~31 年 : 29~30 歳)。
- ・ロマーニ(Felice Romani)の台本による歌劇《ノルマ》(Norma)を作曲する(1831 年 : 30 歳)

第 5 期 (晩年期) : 1833 年~35 年 (32 歳~34 歳)

- ・ロマーニ(Felice Romani)の台本による歌劇《テンダのベアトリーチェ》(Beatrice di Tenda)を作曲する(1833 年 : 32 歳)。
- ・ペポリ(Carlo Pepoli)の台本による歌劇《清教徒》(I Puritani)を作曲する(1834 年 : 33 歳)

上記の分析の結果、イタリア・ロマン派オペラを代表するベッリーニが、34 年という短命な生涯において、オペラ、宗教曲、室内声楽曲など多くの作品を作曲したことが分かった。特に、ベル・カント・オペラの様式を踏まえた作品として、歌劇《ノルマ》、《夢遊病の女》、《清教徒》、《カプレーティ家とモンテッキ家》では、気品に満ちた流麗で、優雅な旋律が特徴の魅力的なオペラを残した作曲家であり、洗練された作品を書いている。ベッリーニの声自体の美しさを重視するベル・カント唱法を生かした旋律は、光り輝く崇高な旋律が特徴的で、特にフレデリック・フランソワ・ショパンに多大な影響を与えたことも解明できた。また、ベッリーニの人物像を特徴づけるものとして、彼の性格は至って気高く、善良であり、その魂は、汚らわしいものに触れることなく、純潔さを留めており、ベッリーニが本質的に高潔な人物であることが分かった。さらに、生涯の友人であるフランチェスコ・フロリモ(Francesco Florimo:1800-88)は、ベッリーニのことを「純潔な魂」と評しており、ロッシーニは「彼は、非常に美しく、慈愛に富んだ心の人」と語り、また作曲家の友人フェルディナンド・ヒリア(Ferdinando Hiller:1811~1885)は、「彼の性格には、心を捉えるその旋律同様、心地良い魅力があり、思いやりがあった」と書いていることから、分析の結果彼の人物像を具体的に窺い知ることができた。

第二に、当時最も優秀な詩作家であった台本作家フェリーチェ・ロマーニとの関わりを研究することで、ベッリーニの音楽の要素では、音楽とテキストの密接な関係が最も重要とされ、ベッリーニの音楽は、心から生まれるものであり、テキストとは切っても切れない結びつきがあることが分かった。つまり、彼の旋律では、テキストが正確に朗読され、言葉のアクセントと音楽のアクセントが一致している。

また、それぞれの場面において、知的な内容と雰囲気表現されている。従って、ベッリーニの創造力を掻き立てるには、上質の台本と歌詞が必要であり、彼は、歌詞の詩としての長所や欠点に対して真摯であり、良い言葉を何よりも好んでいたことが分かった。

つまり、台本作家フェリーチェ・ロマーニに非常に忠実に従って作曲し、登場人物の研究、詩の朗読、話し言葉の旋律を音楽への旋律へと書き換える作業やピアノを使った試作を行い、様々なイタリア語の詩型に対応させ、特に幅の広い長い旋律曲線の特徴とする作曲を行って、歌劇《ノルマ》(Norma)に代表される「汚れのない女神よ」(Casta Diva)のような恍惚感に溢れた響きを展開し、最上級の表現力を獲得できたことを解明できた。ベッリーニは、「私に良い詩を与えてください。そうすれば私は良い音楽をあなたに捧げます」と語っていたように、ベッリーニと台本作家ロマーニとの長く実りある協力関係がベッリーニの繊細にして、均整の取れた旋律を生み出すきっかけになったことが解明できた。

第三に、彼の歌曲作品の中でも、特に歌われる機会の多いメゾ・ソプラノの為に書かれた「3つのアリエッタ」(Tre Ariette)とピアニストの友人の妻であるメゾ・ソプラノのマリアンナ・ポリーニ(Marianna Pollini)夫人に献呈された「6つのアリエッタ」(Sei Ariette)に焦点を絞って、それぞれの作品の韻律法と音楽的特性を分析すると共に、詩の理解を深めた表現法や作曲家による様式感について研究を行った。

この分析により、ベッリーニは良い言葉を何よりも好み、歌詞に対して真摯であることが分かった。さらにベッリーニの音楽におけるロマンティズムの源は、音の恍惚感であり、狭い音程に対する好みがあり、半音音程を滑らかに移行することにより、強烈さと甘さをもつ旋律を好んで作曲していることが分かった。また、彼の和声の個性的な面として、特に長調と短調が頻繁に交替することがある。さらに、カンタービレな旋律線を伴奏が極めて控えめに、和声的に支えている点も個性的と言えよう。

以上のように、「ベッリーニ歌曲集」はメロディが極めて美しく、純粋な響きと気品に満ちた情緒がある作品集で、飽きることなく繰り返し学ぶことができる。さらに、イタリア語の言葉のアクセントと音楽のアクセントが一致しており、理想的なベル・カント唱法を習得するために無理なく活用することができることが分析できた。

従って、ベッリーニの作品を演奏するには、“美しい歌唱”、すなわち発声器官が正しく機能し、発声器官や呼吸器の作用が制御されていて、完全な調和が成り立っていることが必要となる。

つまり、ベル・カントの歌唱では、声が自由で、かつ広い音域にわたって、真に共鳴した音となって現れ、また最強音から最弱音までを完全にコントロールでき、楽にそしてしなやかに演奏できる真に美しい音を体得することが大切となってくる。

ベッリーニの作品を歌唱する上で最も重要なことは、ベル・カントの発声法を基盤として、美しい響きによる母音唱法(レガート唱法)を徹底させ、韻律を理解した上で、言葉にイントネーション(抑揚)をつけ、詩を良く理解した語感で、表情のあるブレスを心がけることが最も重要なことであることが分かった。つまり、劇的緊張との均衡が良く取れた歌唱様式を構築することが何よりも大切と言えよう。

4. 今後の予想される成果及び研究の今後の展望

イタリア歌曲を歌唱する際には、基礎となる正しい柔軟な発声、イタリア語の詩の明確な発音及び詩の解釈だけでなく、作曲家及び作詩者の心理状態を詳細に理解した上で、心を込めて歌唱することがより音楽性豊かな説得力のある演奏へと導くことができる。つまり、イタリア語の正しく楽な自然的な発声法であるベル・カント唱法を体得することで、無理のない自然な発声法により、声に潤いと艶のある美しい声により、音色の変化に富み、表現力豊かな芸術的な歌唱が可能となる。

今回の研究ではまだ調査することができなかった、ベッリーニの生地であるカターニアの「ベッリーニ博物館」での自筆譜との比較分析とベッリーニ作曲の歌劇《アデルソンとサルヴィーニ》(Adelson e Salvini)のファクシ

ミリが現存しているので、さらに研究を重ねてベッリーニの全貌を綿密に解明するつもりである。

また、今回の研究の成果は、大学や短期大学における声楽の実技の歌唱指導を行う上での教材として活用することは言うまでもなく、これから声楽の勉強を始めようとする学生にとって、また生涯教育として声楽を学ぶ方々にとっても、適切にベル・カント唱法をわかりやすく継続して活用し、学ぶことができるように、また文化センターや自治体で実施されている合唱団、あるいは、コミュニティ・カレッジやコミュニティ・スクールでの発声指導としても活用できるように研究を重ねるつもりである。

さらに、歌唱指導における下記のプログラムを構築し、指導者として、「喉を開いて歌う」テクニックを「どうすれば喉を開くことができるのか」ということを、その方法を、生徒が正しく理解して実行できるように指導するために、指導法の工夫を重ねると共に、更に研究を重ねて地域の自主的な音楽活動の促進に寄与できるように尽力していきたいと思う。

- (1) 基礎となる柔軟な発声法としての『ベル・カント唱法』
- (2) イタリア語の詩の明確な発音と詩の解釈としての『ベッリーニの歌曲作品』の演奏法と解釈
- (3) 音楽性豊かな説得力ある演奏へと導くための歌唱指導法

5. 主な学会発表及び論文等

本研究による成果を本学の紀要に投稿すると共に、科学研究費助成事業（科研費）の申請を行う予定である。